

とくしゅう

転機

南からの強い風

春一番が吹きあれる

雪は消え

草木がいつせいに芽をふく

水はぬるみ

小動物らが蠢きはじめる

野にいでて

野良しごとに精をだそう

浜におり

磯あそびをたのしもう

あるいは山をかけ

この季節の到来を

よろこびうたおう

南からの強い風

あたらしいなにかが

はじまるとき

南からの強い風

きみのすむ街にも

風よ吹け



朝の詩

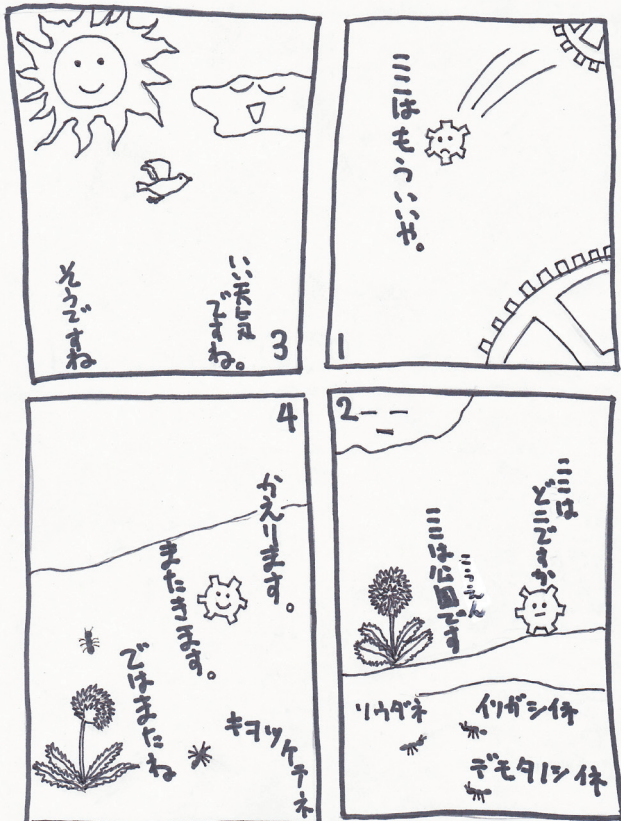
なきなきいなきたい時はかまわずにだれが見ようと涙の露がかれるまで
猫が見ようと犬が見ても魚が見ようと花が見ても森のフクロもない
ている。月夜の晩にホーホーホーツと悔しい想い消えるまで 悲しい思
えるまで 身体の痛み消えるまで 心のキズが癒えるまで 命の泉しよっぱい
ねの露もしよっぱいね。

ないてないたらほら見てこらん鏡の顔がもう泣き笑い 笑い泣き泣い
たあとで笑顔がいいね。ステキだよ。スマイル、スマイル、元気をだして
大好きな歌を歌いながら幸せの路をさあ行こう。

アルミ缶23号(釜ヶ崎に暮らす)

テンキ

7回 77



その出会い、 転機となるか

ココルームで毎月一回開いているえんがわ健康相談会。商店街を通り行く人に声をかけ、みんなの不安に耳を傾けてくださっている、看護師の梅田道子さんに、ご自身の「人生の転機」についてお伺いしました。

◎ここが転機だったと、今振り返ってはっきりわかるポイントはありますか？

2000年頃、私は西成の病院にたまたま勤めることになりました。その病院は、野宿を余儀なくされた方たち専門の救急医療の病院で、野戦病院のような雰囲気です。その頃に、大阪大学公衆衛生学の高取毛先生から、入院患者の聴き取り調査を手伝わないかという話があり、600人位の患者さんの聴き取りをさせていただきました。ひとりひとりの患者さんと向き合っただけで話を聞いていくうちに、野宿にならざるを得ない状況になったのは、ただ個人の怠りから生じているのではなく、背後に大きな社会的な問題があるということを知りました。この体験は大きな転機の一つだと思っています。

◎これまでの経緯を教えてくださいませんか？

若い頃はOLでした。結婚後10年近く専業主婦で、何か仕事しようと思った時、昔取得した資格を思い出し看護師になろうと考えました。それからが大変で、もう一度勉強しようと子どもと一緒に数学や英語など、あんなに勉強したのは最初で最後かもしれない。そして、自宅から40分圏内の病院で看護師として働きました。今も三重県在住です。2000年に娘が大阪の学校進学のため友達と暮らすことになり、監視の意味も含め西成にある病院に勤務しました。ホームレス問題などに関心があったことを考えると、この病院勤務が私の人生の大きな転機になったのだらうと思います。

◎その病院で働くことに、抵抗はなかったですか？

全然なかったですよ。いい病院にしようとは私には燃えませんでした。ナイチンゲールっていったら看護師の鏡で、クリミア戦争のとき、くるぶしまでの長いドレスでシルクの衣擦れの音をたててロウソクを持って兵士の看病をした人で、私の憧れでした。こういうところで働かなければ本当の看護師とは言えない、というのがあったんです。ひとりひとりの話をしっかり聞かせていただき、その苦しさとか悲しさを癒せたらなと思っていたのです。

◎そこから今の訪問看護のお仕事にどうつながったのですか？

入院すると衣食住が満たされ、病状が一時的には安定します。私が医療の限界と一番感じた事例が糖尿病の患者さんでした。医師の指示で、薬物療法、食事療法、運動療法とすすめ、退院後の生活の仕方も視野にいった看護計画を立てました。インシュリンの自己管理もでき、病状も安定したのですが、帰るところは路上なのです。継続治療の前に生活ができないのです。今は糖尿病の患者さんの例を挙げましたが、その他に癌などの手術後も路上だったり、普通だったら考えられないような現実でした。なんのための医療なのかという思いと、医療の前に福祉ではないかと強く考えるきっかけになりました。例えば血圧が高い人にただ薬を出していても、その人の部屋に行ったらラーメンしかなかったとかね。やはり患者さんの生活を知らないとなかなか医療はできなと感じます。病院での看護もありだけど、患者さんの話を聞きながら、ともに考えていく訪問看護に意義を感じています。

◎訪問看護で部屋を片付けたりもされるんですか？

時と場合にもよりますが、今は積極的にしません。片付けたのは私の気持ちで、患者さんは望んでない、ということを経験から学びました。以前に、かなり雑然としていた部屋をみんなで整理整頓をしようとして、徐々に片付けていたら、ある日、「もう来ないでくれ」と言われて、ハッと気づいて価値観を押し付けていたなあーと反省しました。

◎今もおこなわれている健康相談について聞かせてください

病院勤務時、釜ヶ崎の支援者の方々との交流の機会がありました。そんな中、ある福祉法人の部長さんとの出会いがあり、福祉の世界に私のような考えの医療者がいるのは重要だとおだてていただき、転職しました。病院退職時から、この地域でできることはないかと考えていましたので、法人に「野宿を余儀なくされている方たちの健康状態を把握したい」と提案しました。ちょうどその時、釜ヶ崎にある施設から、月に2回ほど健康相談をしてほしいとの依頼があり、月2回、健康相談を始めました。また、大阪市役所の前でも炊き出しをしていた時期があり、そこで健康相談をさせていただき、現在は桜ノ宮で月1回やっています。メンバーは歯科医師、口腔衛生士、神父さん(散髪)、看護師の私です。昨年からはココルームでもやらせていただき、健康相談開始から10年になります。この健康相談は私にとってやるべき仕事のもっともたるものと言っていいと思います。病院での看護から地域看護への転機であろうと思っています。

◎おじさんたちの話を聞いて感じることはどんなことですか？

話を聞くと、怠け者だから仕事がないわけでは、決してないのです。今までやってきた仕事が無くなった、怪我をした後に雇ってくれない、年齢制限があるなどさまざまです。また幼少の頃のことを、ぼつぼつと語ってくれるのを聞いてみると、戦争で父親を亡くした、母親が再婚し、新しい兄弟ができて居づらくて家を飛び出したとか、または貧乏で食べるものもなくつらい思い出しかないなど……。それらは社会的な要因から生じた問題であり、必ずしも本人の責任ではないと思います。

◎以前すこしお話をうかがったアルコール依存症の方のお話を聞かせていただけますか？

あの人は忘れられないですね。彼は突然の大きなショックから立ち直れなくなったのです。その人は、いつも酔っぱらって路上で寝ているところを、救急車で運ばれてきたんです。禁断症状が薄れてきたときに話を聞いていくと、「自分は普通に親子で幸せに暮らしていた。もう20数年前になるけど、娘が小学校に上がるので、高島屋にランドセルを買に行ったときだった。自分は車で待っていた。妻と子どもがランドセルを持って、『お父さん!』と言って走ってきたそのすぐ目の前で2人とも車にはねられ死んだ」と言うのです。それから彼は立ち直れず、アルコールに逃げるしか道はなかったと言うのです。また、「路上で寝ていると人の足音がどんどん近づき、そして遠ざかっていく。コンクリートの中に溶けていくように感じながら、薄れゆく意識のなかに、ランドセルを持った娘と妻がいる」とも言いました。お酒を飲んで意識を失いそうなときに、妻と子どもの姿が見えると言うんですね。彼は最終的にはアルコール依存症から抜け出せないまま、肝臓を患って亡くなりました。辛い体験をした話を聞きながら思ったのは、すごく大きなショックを受けたときの支援でしようか。誰かの支えがあれば危機的な状態から抜け出したのではないかと思います。アルコール依存のことでは、生きている目的が自分の中で見つければ、抜け出せる場合もあります。自分の根性だけでは治せないの、きちんと病気を捉えて治療をすることをすすめています。

◎他にも印象に残っている、おじさんとの会話はありますか？

この間亡くなられたNさんは糖尿病でした。だけど、いつも難波まで行って北極のアイスキャンディを買ってきて食べるのです。何故かと聞くと、「兵庫県にある北極のアイスの工場はわしが作ったんやで」と言う。胸が熱くなりました。

◎人の話をどういう姿勢で聞くのがよいと思いますか？

共感できることだと思います。そのためには、自分の気持ちと相手の気持ちをきちんと分けることが必要だと思います。話を聴きくとき、自分の気持ちを脇に置き相手を感じている気持ちと同じような気持ちになって感じることを、共感ですね。それを心がけています。

話し手：梅田道子(看護師)、聞き手：植田裕子

煙くゆらす火の山

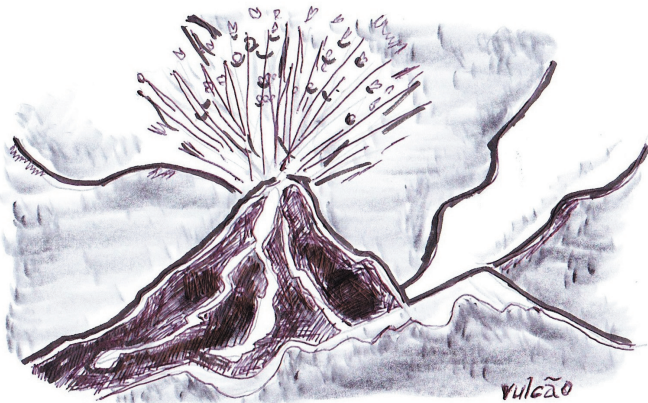
ながい人生には、たいていの場合、転機というものがある。転機とは、ある状態からまた別のある状態への移行をうながすようなきっかけのことだ。人生の転機といったときに、私がまさきに思うかべるのは、社会学者・鶴見和子のことである。2006年に88歳でこの世を去った鶴見さんは、内発的発展論のモデルを構築し、社会学のみならずさまざまな分野に大きな影響を与えた。20代の時に渡米してアメリカの社会学を学んだ彼女は、帰国後、柳田國男あるいは南方熊楠らの思想や成果をとりいれながら、欧米の受け売りでない独自の社会学を展開したことでも知られている。

研究者としての道を歩むことを決意するまで、鶴見さんは歌をよむことに熱中した。歌人・佐佐木信綱について短歌を習っていたというから本格的であった。しかし、学問の世界にはいるにあたり、鶴見さんは歌をよむことをやめてしまった。自身が学問をすすめるにあたって、歌をよむという情緒的なことは学問のさまたげになるからということと、歌に費やす時間があったらいいという理由があったようだ。

鶴見さんの内発的発展論は、水俣でのフィールドワークのなかから生まれでてきた。水俣では、チツソが垂れ流す水銀によって、海が汚され、地域の自然環境ならびに人びとの暮らしが破壊されてしまった。こうした苦難とも呼べる状況から、地域住民と他所者との合力によって、地域の伝統にもとづいた新たな価値観が創出され、そしてさまざまな運動としてかたちになっていく。それは、海と、海をとりまく山や人、そしてすべての生きものが渾然一体となっていた世界への回帰を志向するものであった。このような水俣で起こる社会変化の動きのなかに、鶴見さんは内発的発展論の着想を得たわけである。

1995年、77歳のときに鶴見さんは脳出血で倒れ、身体の自由を失うこととなる。普通なら絶望の淵に追いやられたような気持ちになるだろう。しかし鶴見さんの場合は違った。倒れたその晩から、ことばが短歌のかたちで湧きでてきたのだという。その時のことを鶴見さんは「半世紀死火山となりしを轟きて煙くゆらす歌の火の山」とうたった。何十年ものあいだこころの内側に封印していた歌が、身体の不自由というものを転機として、煙をあげ、そして火をあげ、ドッカーンと噴火したのである。鶴見さんは変化後の自身の生きざまを、「回生」と呼んでいる。

「回生」後の鶴見さんの仕事はすさまじいものがあった。いままで理論としてとらえていた内発的発展というものをみずからの身体的な実感としてとらえることが可能となり、また社会発展の理論であった内発的発展論を、人間の発展の理論としても展開してゆくこととなった。それは感性による支えをとともなうみずみずしい学問でもあった。私たちは、齢を重



ねるとともに、かつてもっていた感性を失ってゆくと思いがちである。しかし、それは決して完全に失われたわけではなく、私たちの胸の内に眠っているだけに過ぎないと私は考えたい。それらをいま一度目覚めさせ、「煙くゆらす火の山」とすることができたら、私たちの人生はきっと豊かなものになるに違いない。

岡本マサヒロ (ココルーム・人類学係)

転機はいつも

私にとっての転機は、大学時代すべてだったように感じる。なかでも背中をとんと押されたのは、大学三年の春に出会ったひとつの公演だった。「こまいぬにほうきぼし」。タイトルだけではなんのことかわからないこの公演は、何らかの障がいや問題をもつ人びとの詩の朗読と、作曲家のピアノの即興演奏が重なる公演だった。

当時の私は、音楽学部でアートマネジメントを学んでいたものの、それまで親しんできたミュージカルや吹奏楽などの音楽の世界を抜け出せず、現代アートの世界で、ましてや社会と芸術のあれこれを一緒に考えるなど、とても遠かった。まわ

りからの、「そんなままでいいの？」という目線が気になり、自分自身にも、本当に知りたいことに全然近づけていない、という漠然とした焦りがあった。学ぼうと思えばいくらでも学べる環境の中で、ただひたすら、左足の先に右足のかかをつけて、歩幅狭く歩いているような毎日だった。

そんなとき、友人に誘われ初めてフェスティバルゲートという大きな建物を訪れた。4FのRemoというスペースで、公演はおこなわれた。その公演について、何か記録に残すことが、当時の私にはできなかった。いや、いまだって書くことができないのではないかと恐い。なんというのだろう、それはほとんど一目惚れみたいな感じだった。

でも少しだけ書く。そこではステージにいる人たちが、思い思いの間合いで言葉を声にし、ただ好きな場所に居る、というふうに見えた。ピアノの椅子に寝転んでいた作曲家は中盤にやっと起き上がり、人差し指ではじめの音を鳴らした。衝撃だった。とにかく私は、こりゃ出会ってしまった、と思った。こんなものに出会えるなら、私、このへんの世界に、四の五の言わずとにかくハマってみよう、とはじめて思った。

その後すぐ大学で、そのときの作曲家・野村誠氏とともにアートプロジェクトを立ち上げる機会に恵まれ(『あーだこーだけーだ』という、今も続くへんてこなプロジェクトです)、公演の主催者・ココルームの假奈代さんの言葉をネットで拾う日々があり、季節を二つほどまたいで、私は緊張をしながらココルームカフェのカウンターに座った。ホットしそジュースを飲んで、お客のおじさんが帰ったのを見計らって、やっとの思いで「お手伝いとかってできるんですか。」と聞いた。

それから、私は押し掛けインターンをしてココルームで一ヶ月半働き、ぎりぎりの単位数で大学を卒業して、迷いながら会社に就職をして、三年弱働いたけどやっぱりココルームのことが気になり、去年の二月に荷物をまとめて大阪に来た。

いま自分がわかっていることなんてちっぽけで、いつでも価値観がゆらぐ可能性がある。頭の中の整理がへたくそで、どうしようもない私だけど、何かが起きるその現場に、とにかく居合わせることだけはできるかもしれない。そんなことを知るきっかけがそこにあった。

でも、ここへ来て何かがすっきりするのかと思いきや、そんなことは全然なく、私はさまざまなことに迷い続けている。ずっと迷いとともにあるのかもしれないし、また、とん、と転がるきっかけがあるかもしれない。

植田裕子 (ココルーム・けんぱんハーモニカ係)

音楽と美術のあいだで

いまのような活動をする前は、現代美術というカテゴリーのなかで創作してたの。20代のときからずっとね。がむしやらに作品つくって、展覧会にだしたりもしてた。作品につかう素材は毎回変わったけど、つたえたいことはかわってない。「対話」のようなことがテーマとしてあったのね。だけど、美術家のときはね、いまおもえば、つきぬけてなかった気がする。まわりからはつきぬけてたようにはみられてたかもしれないけどね。やりきりかんは少なかったかな。わたし、こどもの頃よくうたってたのね。弟が知的障害と目がみえないなどの盲重複障害をもっていて、それで親は家のなかに音楽がある環境をつくろうとしていた。日常的に音楽がながれていたり、みんなであうたりね。弟とよく即興の芝居して遊んだりもしたよ。だから、音楽やるほうが自然ではあった。絵も小さい頃から好きで描いてはいたんだけど、親には美術やるなら音楽やれってしつこくいわれて、それで反発心から絵にいったの。でもね、絵

をやってもほんとうはこれでいいのかなとずっとおもってた。33歳くらいの時かな、作品つくれなくなったんだよね。そして、数年かけてどんどんやばくなっていったんだ。もう美術やめようとおもって、その頃、ある会社に就職したの。ウェブつくったり販促とか事務の仕事ね。でも会社のなかで嫌なめにあったんだよね。そこから精神的にまいっちゃったんだ。体調も最悪の時期だった。

夢中になれることをみつけた

でもね、会社で働いたらお給料もらえるじゃん。美術家のときとくらべるとすごい大金でね。それである日、家の近くの楽器屋さんに行ったんだよね。そしたら、ジャンベのクラスがあって、体験入学したら、ものすごくたのしかったんだ。たたいているだけですごくいいあわせになって、それでジャンベがどーしてもほしくなって買ったの。それから寝ても覚めてもジャンベたたくことばかりかんがえてた。レッスン以外にもたたくための部屋かりてさ、そこでひとり自主練するようになったんだ。そのうち同じクラスの子も一緒にやるようになって、それから人がふえていったんだ。そのときは太鼓中心でうたはかけごえくらいだった。わたしがこえだして、アフリカの古典的リズムでたたいてた。でさ、その頃は、会社に太鼓をもって通勤してたの。なにそれ？っていわれたりしてね。会社での嫌なことはあいかわらずつづいていたけど、太鼓たたいてるときだけは気分転換になってたのね。しばらくはすごいたのしかった。でもね、わたし、きめられたことするのが苦手なの。もともと即興好きだったのもあって、きまったとおりに演奏することがどんどんつまらなくなっていったのね。アフリカの太鼓の音楽やいろんなジャンルの音楽をみんなで沢山きいたんだよね。そしたらみんなからこういう音楽やりたいってこえがでてきたの。みんなさ、しってる曲からはじめたいんだよね。とりあえずそれと同じようにうまく演奏することがしたいんだって気づいた。それが音楽だとおもってたりするのね。ジャンベやってるからってさ、必ずしもアフリカ人の真似する必要はないのよね。なにかを真似し模倣して安心してるみたいなのとこあるとおもうんだけどさ、それってかっこわるくね？ってのが心のどこかにあってね。本当はジャンベをもって自分らしくたたければそれが一番かっこいいとおもうんだ。でもそのことはみんなにはなかなかつたわらなかつた。わたしはうまくたたけた

とかそういう小手先のことじゃなくて、なにこれ！みたこともない！って刺激になるようなことがしたくなかったの。それがいまの活動の原点。即興をやるようになっていろいろ気づいたんだけど、楽譜中心にやると輪には入れない人が即興と参加できることもあるんだよね。そこからよ、即興 LOVE になったのは。楽譜あるとそれをなぞることには気がとられて、対話感がよくなるんだよね。ただ楽器やってるってかんじ。でも即興だとさ、相手の目をみたり、場の空気をよまないで一瞬でひどい音になる。だからものすごい繊細にいっぺんなことをかんじとる技術が必要な訳ね。そしてね、その対話が成功したときに起こる、奇跡的な音の展開や、人とつながったかんじがたまらなくこちよくてね。これって一回体感するとわすれられなくなるの。また即興演奏したくなるんだよね。

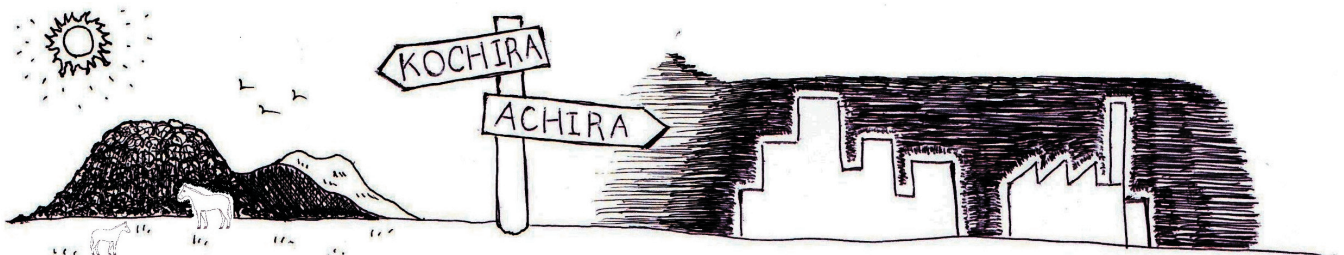


あしもとをみなおす

わたしが美術作品をつくれなくなった理由はさ、美術は家のなかに幸福をもたらさなかったからなんだ。やればやるほどわたしはだんだん孤独になっていくようなかんじがあった。美術ってのは、背景や歴史をしらないとたのしめないところがある。それに絵だと弟はみるのがまづできないしね。うちの家族には美術は浸透しなかったんだよね。母が音楽やれっていったのは間違ってたみたい。美術してて家族が幸せになれるのならつづけてたかもしれないけど、わたしがいくら美術で活躍しても身近な人が誰も救われないのではね。だったら弟や母と一緒に

たのしめることがしたいっておもったの。そういうところから道がひらけるんじゃないかって。ささいなことだけど社会の問題につながってるんじゃないかって、漠然とだけどもなんかそうおもった。ドラムサークルっていうみんなで輪になって太鼓たたく集まりがあるんだけど、太鼓を始めてからそれにも顔だしてみたんだ。ドラムサークルが弟にあってるのとはいう直感がはたらいたのね。それでドラムサークルやってる人に、弟のところまでやってもらえないかって相談したんだけど、結局かなわなかった。その頃、弟は盲学校のOBたちと合唱とかしてたのね。二回ほど参加したんだけどすごく窮屈にみえたんだ。知的障害のある弟に対してきれいなこえをだしなさいとかさ。わたしはある意味、音楽ってきれいにとかうまくやるとかそういうことが目的じゃないとおもってる。本人がたのしめるのが一番じゃない？そんな時がある人から、「それならあなたがやればいいんじゃない？」っていわれてさ。わたしに何ができるか最初はまったくわからなかったんだけどとにかく盲学校のOB会に太鼓もって参加するようになったの。ドラムサークルはみんなで輪になって椅子にすわってやるんだけど、それには意味があって、みんなが中心を向くことでファシリテーターが全体の音をリードしやすいんだよね。そんなふうにはリードする人がいるってのは、楽譜のようなものに頼る音楽と一緒にじゃないかっておもったのね。それってさ、おもしろくないんだよね。対話がうまれにくいし、抑圧されてるかんじがとてするわけ。そんなことをかんじながらわたしなりのアンサンブルのやりかたがうまれていったの。アフリカの太鼓たたいてたって、ロックやってもいいじゃん！演歌やってもいいじゃん！って、おもったり。場に起こった、たとえささいなことでも尊重してね、なるべくなりゆきにまかせると。時にはなにもしなかったりね。こちらからなにか起こすというよりも、発生したことに注目してそれをまわりにひろげていくのが大事かなって。人ってさ、対話レベルが濃くなればなるほど、よろこびをかんじるんだよね。いまの日本は個人で癒されようという傾向が強いけど、人はひとりでは癒されないものだとおもうの。上田紀行さんの「スリランカの悪魔祓い」という





本読んでね腑におちたの。他者と場を共有すること、音を奏でること、おどることやアイコンタクトするとかの、言葉をこえたコミュニケーションをとおして、癒しやよるこびってうまれるとおもうんだよね。よるこぶこととおして、お互い認めあえたりとか、おもいやる気持ちもうまれてくる。そういうところの活動がしたいとおもったんだ。

音楽と美術の垣根をとりはらう

おどりとか、楽器、うたとかをツールとしてね、みんなの作用からうまれる場をいろんな人に体験してほしい。言葉のみにたよるコミュニケーションはちょっと脇に置いて、自分のやりやすい方法で社会とのかかわり方のかんがえたり、きづいたりね。そういう意味では最近音楽と美術の垣根ってなくなってきた。音を奏でながらみんなで絵描いたり、その絵から音を奏でたりもしてる。もともとみんないいものをもってらんだもんね。出てくるおおもとは一緒。絵だ一音だ一ってわけの意味がかんじられなくなってきちゃった。身近にそういったことをたのしく試せる場があって、そこを通じていろんな人であってね、生きる力をもっと底上げしたりアレンジできたらいいとおもう。そんな場を用意することがわたしの仕事かな。「音楽は生きる為の戦略だ」って誰かがいってた。そう、わたしは「イキルタメノセンリヤク」をみんなと大口あけてバカ笑いしながら大まじめに実践していきたいのね。

ナカガワエリ (即興楽団 Udje() 団長)

「アンサンブルの会」

音を中心として身体を使ったワークショップを 2009 年より盲学校、特別支援学級、特別支援学校、地域の障害者施設などでおこなう。

「アンサンブルの会公認バンド」即興楽団 Udje()」

2010 年に結成した音楽的ユニット。演者と観客という垣根を取払いばらばらで多様なものを活かしながらひとつの場を即興的につくっていくという手法をとる。

※大阪市内にて実践なう。詳しくはウェブサイトから。

<http://udje.tank.jp/wakuwaku/>

転機

- ・今、「転機」ということばでしか表現しえないようなことが、たくさん起こっている。
- ・わたしもまたこの数か月、大阪から東北への移住、転居 2 回、この 4 月には、コクルームの活動も継続しながら、ホースセラピーを中心に行う牧場を運営する NPO のスタッフとして、福島県猪苗代へ移住する。

福島の問題に関わる中では、わかりやすく、大きくそれを感じている。

悩みに悩んだ末、移住を決めたたくさんの福島の知人。大変な決断と不安の中でも、「この原発事故があって、たくさんのことを学ぶことができ、たくさんの普段出会えないような人と出会えて、良かった。」と言葉にする人がいる。周囲の人に、放射能の勉強会に参加しない？と声をかけるようになった人がいる。生まれて初めて市民活動に参加して、たのしさを知った人、なかまがいることのゆたかさを知った人、世界のおかしさや矛盾に出会った人。政治や行政のおかしさと、そこへの言葉や想いの届かなさを感じた人。家族とちゃんとケンカをした人、こどもと一生懸命話をした人。地域の人に働きかけた人。地域の在り方、こどもの育て方、家族の在り方、自分のくらしの在り方、言葉を出すこと、判断すること、生きること、死ぬこと、息をすうこと、、、あらゆることをあらためて考え始めている人がたくさんいる。

しかし、ここで、あえて話をしたいのは、震災と原発事件の影響を大きく受けた地域ではなく、都市にくらす、わたしの友人知人にも変化をつよく感じていることだ。

わたしの知人には福島や東北に暮らす人以外に、今、転職している人がたくさんいる。仕事をともかく辞めた人が数人いる。転居した人がいる。根なし草にあえてなった人もいる。旅を始めた人がいる。場所をもった人もいる。お金をもたなくなってきた人がいる。いつでも移動できるように荷物を整理したり、物を捨てる人がいる。グループをつくった人もいる。結婚をした人もいる。具体的な何かでなくても、志をあらたにもった人や、問題意識をつよくもつようになった人もいる。ひとつひとつは、大きな世界の中では、あたりまえの出来事かもしれない。転職する人はもともとたくさんいる。結婚だってする人はたくさんいる。でも、なにかがそれ以前とちがっているように見える。ささやかでもそこに確かな意志があって、人や人生がうごいている感覚。ひとつひとつは単独のものなのだけれど、出会いが連鎖し、それぞれを少しずつつないでいる。そんな感覚がある。

今まで、なんとなく、なんとなく、で動いて、都市に集中するたくさんの人の動きのひとつひとつが、個々の大きかったり小さかったりする変化のなかで、本人さえ気づかないかもしれない意志を持って動き始めたとき、今まで出会えなかった人が出会い、今までなかった仕事生まれ、今までになかった道が見え、転機が転機を呼び込みながら、人生や世界がちいさくすこしずつ動いている。

それは、歩く道を一本変えてみた、とか、普段行かないような地域に行ってみたとか、行ったことのないようなお店に入ってみたとか、普段みない本を手にとってみたとか、企画になんとか足を運んでみたとか、普段見ない映画を見てみたとか、それもだれかに誘われて行ってみたとか、そういうほんの小さな選択の変化を、何千万人という単位で人がしたときに、なにか違うなという感覚が起こるのかもしれない。

それが、福島や震災でさまざまな困難を抱えている世界と、それをもう忘れていたような早いスピードで動く巨大な都市の世界が、分断の中でもつながっている、と感じる瞬間である。どこに身を置く人も、大きさや質のちがいはあるけれど、あの日からの時間の中で感じ考えた。それはすぐにボランティアに行くとか、そういう瞬発的なものだけではなく、むしろこの一年間の時間の中で少しずつ練り積み上げられてきたものであり、これから何十年かけて練られながら動いていくものだと思う。今動いていなくても。

福島の問題に関わると、その途方もなさ、大きさに度々足も思考も止まり、どうしようもない無力感や、虚無感にかられる。それでも、世界は捨てたものでない、と思えるのは、都市でも、大きな被害のなかった地域でも、被害や影響があった地域でも、自分の意志で自分の人生を決め、ささいなことでも、一歩でなくとも半歩でも足を踏み出し、心配な道でも、それでも他人に決められない自分の人生で、世界に存在しはじめた誰かの良い顔や良い言葉に出会っているからだと思う。それがなければ、この途方もない社会や世界に立ちきれない。自分のいのちとくらしに尊厳をもって、かけがえない人生を笑いながら生きるいのちといっしょに、わたしも自分の人生に立っていききたい、と思う。

原田麻以 (コクルーム東北支局)

はじめのバイト「中華料理てっちゃん」の衝撃

中学3年の冬休み。15歳になったのでバイトでもやろうと、地元の「中華料理てっちゃん」の「バイト募集」の貼り紙を見て、店に飛び込んだ。履歴書を書いてもっていき、「すいません。バイトの面接に来たもんですけど・・・」と言うと、店のおっちゃん(てっちゃん)はぼくの履歴書もなにも見ずに「おお。新しいバイトの子か。うん。よし。ええがな。このメニュー表のメニューと値段を覚えて明日夕方6時に来てくれ!」とひと言。緊張していったのに、ようわからぬうちにバイトとなることが決定し、メニュー表を一晚で覚えてこいといわれて、必死になってそれを覚えて、翌日、言われた時間に店へ。ところが店につくと、てっちゃんは「おお。ようきたな!」なんてことをいいながら、「こっちに来て!」と店の中には入れず、なぜか店の裏側の勝手口にやってきて、その蛇口の前に冷凍海老とバケツをセット。「こうやって殻を剥くんや!」と冷水で冷凍海老の氷を溶かして、その殻を見事に剥くというのを、いくつかやって見せると「ほな、これ、やっというて」と自分だけ店に入ってしまった。あっけにとられたが、しょう

がないから言われた通りに、真冬の水を使用しながら凍った海老の殻をむく。すぐに手は真っ赤になって「いったい昨日、徹夜でメニュー表と値段を覚えたのはなんやったんや?」と思いつながら、約1時間ほど無心に殻を剥き続けていると(このころのぼくはとてもナイーブでまじめでええコでした。今もそうやけど)、てっちゃんが勝手口から現れて顔を出し、バケツにたまった海老を見て「おまえ、なかなか真面目やな。よし、採用!」と大声で告げた。

要するに、この冷凍海老の殻剥きがバイトの採用試験やったんですな。履歴書を見ないことも、メニュー表を覚えてこいという無茶振りも、ぼくという人間を見るためのてっちゃん流のテストだったわけです。これがすごい衝撃で、「そうか。実社会というのは、常にこうやって人間を試してるんや」ということは、はたと気づかされた。学校のテストのようにわかりやすく「さあ、今から問題を解きましょう」「答え合をしましょう」「正解です」「間違ってます」なんて教えてくれないし、この世の中はそういう風に動いていない。これでぼくは学校の無意味性、無価値に気づいてしまい、「こんなことをやっているのはアカン! なにがサイン・コサイン・タンジェントや! 富士山麓にオウム鳴くや!」と、高校中退。高校も大学もいかになくていいが「100個の仕事を経験しよう」とバイト遍歴の時代に突入する。これは結局、60ぐらいで終わったが、いろんな仕事を体験したことは人生の素晴らしい糧となっている。

ちなみにてっちゃんは広島の人で、50ぐらいの歳だったが、ぼくが18歳ぐらいのときに腰をいまして(ぼくはてっちゃんのバイトは1年ぐらいでやめたが、たまに食べにいった)、中華鍋が重い」という理由で「中華料理てっちゃん」から「和食処てっちゃん」に店を大幅改装。隣の店舗まで購入して5000万(バブルでしたなあ)かけてリニューアルオープンした。また、じつはてっちゃんは若いころから和食屋がやりたかったが、兄(この兄も料理人らしい)から「おまえは中華のほうがええ」といわれてしぶしぶ中華をやっていたそうで、年齢50にして、ついに長年の夢をかなえたわけだ。ところが兄の警告の通りで、てっちゃんは中華料理の腕前はよかったが、うどん、そばの腕前はまるでダメで、あっというまに店が傾き、ぼくが20歳ぐらいのときにてっちゃんは夜逃げしてしまった。そう。青春の夢は一瞬は適えることが出来たとしても、維持することはとても難しい。最後の最後まで、いろいろと人生の深み、味わい、含蓄を教えてくれた人だった。ありがとう。てっちゃん。元気でやっていてくれたら、ぼくは、とても、うれしい。

むつさとし(まち歩きプロデューサー)

大阪で304コースを有する日本最大のまち歩きプロジェクト「大阪あそ歩」(<http://www.osaka-asobo.jp>)や関西私鉄各社との連携まち歩きプロジェクト「関西あそ歩」(<http://www.kansai-asobo.jp>)などを手がける。日夜、まちを逍遙している。

くりかえしくりかえされる日々のなかで

・ 転機に必要なものは瞬発力の勇気ではない。のんびんだらりとつづく日常のなかで自分で考える、ことばにすることと、ともだち・仲間をもつことだ。
・ 自分で考えるというのはひとりの作業。仲間をもつことは他者との作業。ふたつのベクトルは反対にみえるが、それでもこの両方をあわせもつことが大事だとつくづく思う。自分で考えたことをことばにするのはなかなかやっかいで、だからこそ仲間が必要だ。聴いてもらう。意見をもらう。おなじ考えの仲間ばかりと話してもひとり考えているのと変わらない。自分の考えと違う人も大事だ。だからといって、いろんな考えにふりまわされるのも考えもの。自分で考えることを放棄してはいけない。
・ 生きていれば転機はあるものだ。流されてよかつたときもあるだろう。そのときはちゃんと流されていることを自覚しておくほうがよい。自分でそれをひきうけているとわかっておく。言い訳しないことが大事だ。「わはは、流されちゃったの!」と笑い飛ばせるくらいに。けれど場合によっては、

あまりに膠着する問題が起こったときには、自分のなかで距離を置きちょっと離れて、何もかもを自分のせいになさなくていい。そして持久走のつもりで、日常のなかでバランスをとる。

さて、こんなことを書きながら、わたしが無事に転機をのりきれたかという、そうではない。けっこう無様で恥ずかしいことばかりだ。29歳のとき、八年つづけていたコピーライターの仕事に情熱を持たなくなり、同時に住み慣れた京都を出ようと考えた。ところが、とたんに体調がおかしくなって微熱がつづいた。こうなると、なにかも無理無理、と自分に言い聞かせてしまう。そんなときに、ある大人にさりげなく一言だけ「逃げてるんやね」と言われた。そこで、ハッとわたしは自分の思考の仕組みに気づいた。体調を悪くしてしまえば、こんなわたしが転職できるはずがないと言ってしまうから、思考停止のために自分で自分の身体にしんどいおもいをさせているわけだ。そこで、いったん転職を考えるまえに体調を戻すことを優先することにした。呼吸法や体操をして、ご飯もちゃんと食べて生活を整えた。半年たないうちに体力が戻り、こころも落ち着いた。すると自然と「ああ、どんな場所で生活してもどんな仕事でもいいなあ、人生いろんなこと経験したら、きっとおもしろいやろうな。もしうまくいかんかったらまた別の道を選んだらいいんやな」と思えるようになった。そのあとの行動は粛々とすすめた。職場に退職を告げ、一ヶ月後に調理専門学校に入学した。真面目に一年間勉強し、吉野の山奥、鹿や猿が棲むような村のホテルに就職した。ところが重いものを持つ厨房の仕事に腰を痛め結局四ヶ月で退職することになる。たった数行の一年四ヶ月が無駄だったとは思わない。話し相手もほとんどいなかったが夜空の満天の星を眺めると、星がカラカラと笑う。生きてることを見守られていると感じた。かけがえのない時間だった。なによりも孤独と仲良くできた経験は人生にとって



大切なものだと思う。

そして、失業保険を待つ気もなく、ふたたびことばの仕事をしたいと心底思うようになっていた。ライターの仕事をして友人知人に連絡をとり、紹介された仕事のために大阪に引越すことにした。それでも一年でライターの仕事をクビになる。その頃、詩を仕事にしたいと相談をうけた若者の自殺をきっかけに悩んだすえ、前に迷ったときのことを反芻した。誰にとめられてるわけじゃない、自分の固定観念に縛られてるだけなんやな、あかんかったらごめんなさいって言ってまたやり直したらいいわと思ひ、闘う詩人は詩業家宣言をして現在にいたる。

人生は誰も代わりに生きられないのだから、誰かのせい何かのせいにしてあきらめたってしょうがない。ただ当たり前の苦勞をひきうけて、深呼吸して、ありがとうって思えるならだいたいじょうぶ。ふらふら迷走し、いろんな人を傷つけてしまった。そして今でもいるんな失敗するたびに、成長し回復するチャンスが来たんだなと思えるようになった。

転職から転職へ、わたしの転職にふりまわされた人たち、職場の人たち、悩みにつきあってくれたともだち・仲間たち、そっと見守ってくれた家族のおかげで、こうして自分の人生を生きています。どんなときも、ひとりで生きてきたわけではなく、いつも誰かが話し相手になってくれた。見守ってくれた。人がいないときは星が相手をしてくれた。

一大事に発揮するのは勇気じゃないのね。いのちの流れに身をおきながら、日々ちゃんとその流れのなかにいて、自分で考え、態度にあらわし、そして人や自然とともに生きることが勇気なんだと思う。そうすれば転職は自然にやってきて、ふりかえればあれが転職だったんだなとわかるだけなのだ。

上田假奈代 (ココルーム・雑用係)

あの地震を経験したあとのせいかいで

- ・ 生きてるといろいろな転職があるけど、転職のただ中ではすぐにはそうだと分からなくて、後から振り返ってみたら「あの時が転職だった」と思うことが多いいんじゃないだろうか。昨年3月11月にあった大きな地震と、それに続く津波による東京電力の福島原子力発電所の事故は、今振り返ったらまさに転職の始まりだった。
- ・ (自分が経験したあの地震を「東日本大震災」ということにどうも抵抗があり、地震、と記します。一般的な内容の話では大丈夫なんだけど、なぜなんだらう)

3月11日の夜、最初に事故の知らせを見たのはニュースじゃなくてツイッターだったかもしれない。「福島の原発が津波でヤバいことになってるらしい」というようなツイートを見て、初めて東京電力福島第一、第二原子力発電所の非常用冷却装置の電源が働かずに緊急停止した原子炉の冷却ができなくなっていることを知った。

埼玉にある我が家では、弟が品川で帰宅難民になり、携帯電話は全く通じず、ツイッターでは知人が安否を知らせ、都内に緊急でもうけられた避難所の情報などがつぎつぎにタイムラインに流れていた。

「炉心融解(メルトダウン)」ということばが開始したのはいつ頃だったろうか。とにかくただならぬことになりそうだという予感があったものの、政府広報では「メルトダウンの可能性はある」と口にした担当者が更迭され、その言葉が訂正されていた。(あとにはそれが本当は正しかったことが分かるんだけど)

あのときに、福島原発の事故について一番詳しく報じていたのは日本テレビだった。正力松太郎と原子力発電導入の経緯

があれば同然だったかもしれないが、一号機の水素爆発で建家が吹き飛ばす映像を最初に報じたのは日テレで、他の局はそのときにはほとんど報じていなかったのを覚えている。

事故のニュースが流れるたびに、わたしの心の中にあつた言葉は「やっぱり」であつたと思う。「そんな、まさか、ありうるはずがない」というおどろきよりも、「やっぱり、そうだよな、あれだけの地震があつたら事故が起きて放射性物質が放出されるよね」という納得があつた。そして、そのことをとても恥ずかしく感じている。考えてみれば、こんなに地震が頻発し、津波の被害もあるのに、冷却水をとるためには沿岸に立地させないといけなくて、という条件で原子力発電所を54基も国土につくってきたのだ。そのことに、いい印象はもってなかったものの、反対する行動をなにもとってきいていなかったのだから。

事故をきっかけにわたしとこどもは2011年6月から大阪に移住することになった。

疎開生活を送るにあたってはココルームの上田假奈代さんはじめスタッフや釜ヶ崎の多くの方々に大変にお世話になっている。

原子力発電所の事故があつてから、電力会社について調べたり、再生可能エネルギーやスマートグリッドなどの電力にかかわる本を読んだりするようになった。その中で、改めて感じたのは、エネルギー戦略というのは国家の根幹に関わる、ということだ。それは私たちの生活にも直結していて、計画停電や節電生活を送ると、いかに自分の生活が電気に依存しているか、石油などのエネルギーがないと成り立たないかを実感する。今住んでいるのは昭和の古い家屋で、冬の朝は部屋の中でも息が白くなり、親子そろってなかなか布団からでられない。エアコンやストーブなどで暖かく過ごせることのありがたさを肌身に感じているからだ。

そういう大きな影響をもつエネルギーの問題なのだが、インフラというのは一度整備されてしまうと、その存在についてついつい当然視してしまっていた。でも、東京電力の原子力発電所の事故を受けて、これからの生活で、どういったエネルギーを選ぶのがふさわしいのか、ちゃんと考えて、政治や行政の動きについてもみていきたい。

そういう意味で、大阪で原発の是非を巡る住民投票の署名が必要数に達したのはうれしい動きだと思う。多くの人が、今回の事故を自分のこととして考えている結果だと思う。電気やエネルギーの問題は、さまざまな要素が複雑にからみ、政治的な思惑が影響する事柄だが、考えることを放棄しないようにしたい。

多くの人にとって、とてもつらい影響を及ぼしている原発事故となったが、このことを原子力発電の是非について考える転職としなければいけない、と思うのだ。

これから、長い期間かかって原発事故の補償をしたり、電力会社の仕組みをかえていかななくてはならなくて、ついつい他人事になってしまっただけで、自分の問題として、考えていきたい。

追記: わたしが今回の原発事故について考える時に、経済学者の伊東光晴先生の論文「経済学からみた原子力発電」はとても勉強になったので記しておきたいと思います。

経済学の視点から原子力発電技術の未熟さと危険性を指摘した論文です。とくに、原子力発電事故がおきたときの賠償における保険の問題で、アメリカは損害保険会社の補償が低額しかカバーしないため政府が5億ドルまで政府補償をおこなうこととしていること、対する日本では、損害が限度を超えた時には事業者に対して政府が「必要な援助を行うものとする」という表現に変えられたという指摘にはっとさせられました。政府が東京電力の事故のために成立させた「原子力損害賠償支援機構法」のもとになっている法律です。

(『世界岩波書店』2011年8月号)

小手川望 (ココルーム・火鉢係)

EVENT PICK UP



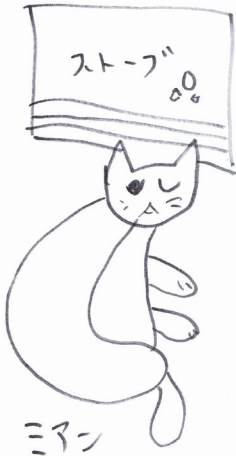
ココルーム、カマン!メディアセンター、こころぎでは、日々さまざまなゆるやかなイベント・勉強会・相談会がおこなわれています。お気軽にご参加ください。くわしくは、<http://www.cocoroom.org> をご覧ください。

釜ヶ崎氷志会 かまがさき ひょうしかい

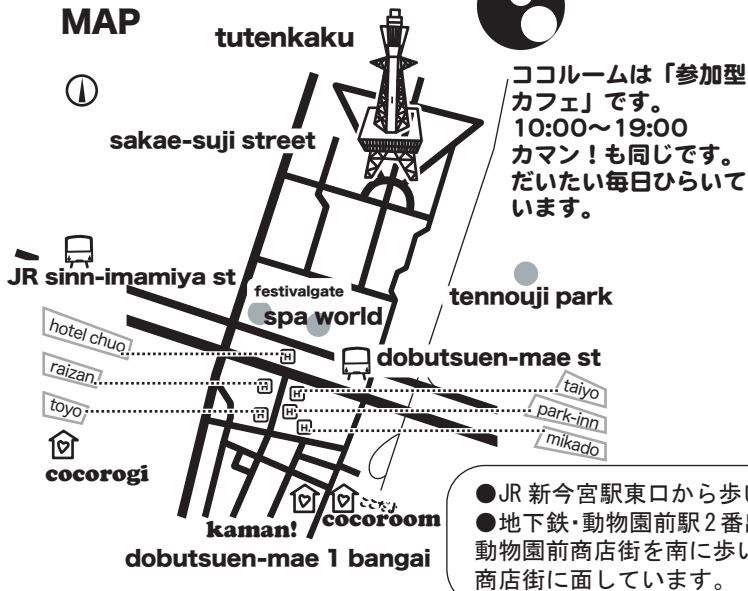
月に一回、ココルームに集まってみんなで楽しく俳句をつくっています。参加者の年齢は9歳から99歳まで。正式な句会のやりかたにのっとり、投句、選句、披講とすめ、つくった俳句は、近江八幡市の俳句結社氷志会の選句の対象にもなります。

2012年2月14日の作品の一部を紹介します

- 飛び立ちし鳥も二三羽冬木立ち (忠太郎)
- 人生もいうこときかぬブレタイン (友藤)
- かまくらに弟と私ポテトチップス (裕湖)
- 菜花咲く街へいよと犬吠える (わむ)
- あの日もまた山やいていたまちを出る (かなよ)
- こよみでは春が来たけどまだ遠い (なかむら)
- 地下鉄を出れば余寒の釜ヶ崎 (暢春)
- うすらいにうつるとんてんふみくたく (ヨシビトシラズ)
- 初鏡くちびる寒し床屋かな (みちをく)
- みあんはねストープあたまつけてるよ (にやにや)



MAP



- JR 新今宮駅東口から歩いて7分。
- 地下鉄・動物園前駅2番出口から、動物園前商店街を南に歩いて3分。商店街に面しています。



特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋 (ココルーム)
Non-profit organization The Room for Full of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)

インフォショップ・カフェ ココルーム
557-0001 大阪市西成区山王 1-15-11
tel&fax.06-6636-1612(+81)
info@cocoroom.org
<http://www.cocoroom.org>
The Information Shop & Cafe COCOROOM
1-15-11 Sannoh, Nishinari-ku,
Osaka, JAPAN 557-0001

カマン!メディアセンター
557-0002 大阪市西成区太子 1-11-6
info@kama-media.org
<http://www.kama-media.org>
KAMAN! Media Center
1-11-6 Taishi, Nishinari-ku, Osaka,
JAPAN 557-0002

まちでつながる。ちょっと生きやすくなる。



かまがさきの街で
体を動かしたり、詩をつくったり、
暮らしや気持ちについて
気になっていることを
おしゃべりしたりします。

えんがわけんこう相談会

血圧をはかり、お口のケアを学びます

会場1: カマン!メディアセンター前
日時: 毎月第三水曜日 14:00~15:00
4月18日(水)、5月16日(水)、6月20日(水)

会場2: えんがわ茶屋こころぎ前
日時: 奇数月の第一水曜日 14:00~15:00
5月2日(水)、7月4日(水)、9月5日(水)

表現のワークショップ

会場: にこにこプラザ
大阪市西成区菟之茶屋 1-10 大阪市営菟之茶屋第2住宅 109

- 体を動かす 講師: 佐久間新 (舞踏家)
3月8日(木)、4月12日(木) 14:00~16:00
- 出会いを楽しむ 講師: 岩橋由莉 (表現教育実践家)
5月10日(木)、6月21日(木)、7月12日(木) 14:00~16:00
- ことばを楽しむ 講師: 上田假奈代 (詩人)
8月9日(木)、9月13日(木)、10月11日(木) 14:00~16:00

えんがわおしゃべり相談会

- 3月25日(日) 13:30~17:00
一歩はみだして生きる
—シングルのみち釜ヶ崎のみちあるき
講師: イダヒロユキ (「ユニオンぼちぼち」副委員長)、原口剛 (地理学者)
- 4月17日(火) 19:00~21:00
しんどいと共に生きる
—しんどい状況にある人と一緒にいる時どうする?
講師: 倉田めば (薬物依存回復支援団体「Freedom」代表)、アサダワタル (日)

ココルームでは、活動のための寄付をつのっています。

三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通1585265
トクティエイリカツドウハウジングコトバココロノヘヤ

郵便振替 記号01090-5-48059
ココルーム

ココルーム
Cocoroom
とろほくしゅ、ちやうじや
東北ひとり出張所
東北ひとり出張所 ブログ
<http://cocotohoku.jugem.jp>

えんがわ茶屋 こころぎ 557-0004 大阪市西成区菟之茶屋 2-7-7 支援ハウス路木1階
モーニング 毎週 月水金 08:30~13:00 メニュー: コーヒー、昆布茶など 100円~